

学生（東京大学）時代の村山研一君

一柳邦久

村山研一君と知り合ったのは、1968年（昭和43年）4月、東大教養学部のキャンパスだった。43LⅢ7Dという文科Ⅲ類でフランス語を選択した46人の新入生が、駒場の古い教室で、顔を合わせた。受験の重圧から解放され、これまで胸中に育んできた想いをようやく実現する機会がめぐってきた喜びと、新しい世界に直面する不安を皆それぞれに抱えていた。クラスメートはすぐ仲良くなり、授業のあとは喫茶店に行ったり、コンパで賑やかに飲食したり、休みにはピクニックに行ったりして、毎日のように集まって楽しく過ごした。村山君がまずクラスでその力を発揮したのは、「ガリ切り」だった。クラスの名簿を作ったり、文集を発行したりするのにガリ版印刷の技は必要不可欠だった。村山君は、その面倒な作業を手際よくこなし、プリントの文字も美しく、とても読みやすく皆に有り難がられた。

当時はベトナム反戦を中心とした学生運動が世界中で盛り上がっていて、駒場の教養学部も6月から無期限ストライキに入った。入学後2ヶ月で授業は中止となったのだが、43LⅢ7Dのクラスの結束は固かった。バリケードで封鎖されたキャンパス内では学生の姿がすっかり減ってしまったが、クラスメートのうち半数くらいがほとんど毎日、古い教室に集まって討論会を開き、自主授業や読書会を行った。昼からは駒場周辺の喫茶店に場所を替え、時には皆でブラブラと渋谷の街まで歩いて出て、ちょっと背伸びして、レストランで食事をしたり、居酒屋で安酒を飲んだりした。

そうしたクラスメートの交流の中で、村山君の存在は実に大きかった。村山君は大変な読書家で、文学、思想、芸術から映画まで、広範なジャンルに驚くほど豊富な知識を持っていた。クラスメートのあらゆる議論に加わり、誰もまだ読んだことのない本の内容を把握しながら、常に話題をリードしていった。自分の知識の量を誇りたがる仲間は何人かいたけれども、村山君はそれとは違っていたように思う。本当に知的好奇心が旺盛で、興味の趣くままに様々な分野を涉猟し、その知的冒険の面白さを仲間たちと分かち合いたいと思っていたのではないだろうか。われわれは彼の博識ぶりに圧倒されながら、そのやや早口の、興に乗ると少し吃音気味になる話しぶりに、わくわくし、好奇心を大いにそそられたものだ。

そのころ村山君の関心の高かったものの一つが、フランスの現代文学と映画で、当時流行り始めていたロブ・グリエやソレルスの小説を盛んに話題に出し、“ヌーボーロマン” “ヌーボーロマン”と興奮気味に語っていたのを思い出す。もっとも強い印象として残っているのはロブ・グリエとアラン・レネの共作の映画『去年マリエンバートで』で、この映画について、村山君となにを語り合ったか記憶は定かではないが、村山君がいなかったら、この斬新な映画の上映を見逃していたかもしれない。

村山君は学生時代はヌーベルバーグを中心としたフランス映画をもっとも熱心に観ていたのではないだろうか。その頃われわれの関心はもっぱら西欧にあった。

今年2月、実に久しぶりに、東京で村山君と会った。40年のブランクはまるで嘘のようで、数日前の会話の続きをするように、私たちは楽しくおしゃべりをした。村山君は、これから取り掛かろうとしている共同研究の話とともに、戦後の日本映画の数々について、十代のころと変わりなく、エネルギッシュに滔々と語った。今はほとんど省みられることのない映画作品の中に色々面白い発見をしたようで、本当に心から映画を愛しているようだった。二十歳の頃のフランス映画嗜好は、ともすればディレッタントイズムに傾き勝ちだが、村山君は本物の映画好きだった。

1968年という時代、無期限ストライキ中の大学という日常生活から少し遊離した時空間の中で、43LⅢ7Dの仲間たちはかなりユニークなコミュニティを作っていたように思う。夏休みに入り、閑散としたキャンパスでも、しばしばクラスの仲間は集まった。ある日、駒場で全共闘の集会が開かれたが、参加者が極端に少なく、6,000人の学部生の1パーセントにも満たない43LⅢ7Dのクラスメートが半数近くを占めているということがあった。本郷の集会に合流するために、駒場の全共闘が43LⅢ7Dのクラス旗を先頭にして、本郷3丁目の駅から東大正門前まで本郷通りを駆け足デモするというようなことがあった。「過激派」集団みたいに思われるかもしれないが、実態はまるで異なる。

43LⅢ7Dの仲間は高校のクラスメートのように和気藹々として仲が良かった。当時としては珍しく女子学生の割合が多く、明るく華やいだ雰囲気があったためかもしれない。それだけでなく、村山君の穏やかな性格がクラスのムードメーカーとしての大きな役割を果たした面があったように思われる。それに私たちはいつも小難しい議論ばかりしていたわけでもなく、むしろ、歌を歌ったり遊ぶこ

とが大好きな仲間がリーダーシップを発揮していた。

山中湖や谷川岳の寮に合宿に行っただけで無邪気に遊んだこともあった。山中湖の寮では、いくぶん破目はずして騒いだため、寮を管理していたボート部の部員から注意されたことがあった。あまりにも皆で仲良く楽しそうにしているので、ボート部員が嫉妬したのではないかと我々には思われた。

酔った村山君が珍しく、「ボート部にゲバルトを掛けよう！」と怪気炎を上げたことを懐かしく思い出す。きわめて理知的ではあるが、決して冷たくなく、仲間とのつながりを大事にし、正義感の中に秘めた村山君の片鱗を覗いたようで皆面白かった。

1969年1月、安田講堂の攻防戦があり、入学試験が中止になり、「無期限ストライキ」はほぼ1年でうやむやのうちに収束した。授業が再開し、それぞれ専門課程に進んで、43LⅢ7Dのクラスが解散した後も、時折かつてのクラスメートは集まった。

大学4年の夏だったと思うが、奥秩父の山を縦走しようということになり、数人の仲間が長野県側から登って、先ず甲武信岳を目指した。村山君ははじめゆっくりとしたペースで、私には幾分もどかしく感じられた。ところが山頂にたどり着いたところで私が疲労困憊状態となり、とても縦走どころではなく、翌日やむを得ず皆で山梨県側に下りて帰る破目になった。村山君は日頃あまり運動をしているようには見えなかったが、高校時代はワンダーフォーゲル部に属して、山歩きのペースをしっかりと守っていたのだろう。

村山君は知識欲が旺盛で、大変な読書家であったが、決してbookishな人間になるのではなく、自分の五感で世界を確認しながら一歩一歩知の高みを目指して行ったのだと思う。

今年2月に会ったとき、村山君は水問題を

めぐる新しい共同研究に取り組む計画を楽しそうに語っていた。きっと更なる高みを目指して登り、我々に新たなパースペクティブを

開いて見せてくれることになっただろうと思うと本当に残念でならない。